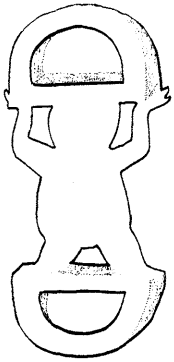
て把握すること、それ以外の観方を忘れた私どもの目の小賢しい近代性は、画面一杯に限りなく延び続けるガジュマルの根や、根元に咲く一輪のハマユウによって、さりげなく無化されてしまうのだから。

（聖学院大学）



子どもがすすめる本

湯沢　朱実

小さな家庭文庫の中で、子どもが三十冊の本を読むたびに「好きな本は？」と問いつづけてきた十三年の記録から、上位の何冊かをご紹介しましょう。

『ひとまねこざる』 H・A・レイ文・絵　岩波書店

このシリーズは、どれも字が多く絵本としては長いので、お母さん達には敬遠されがちです。けれども私は、この本を読んで、子ども達が退屈したという経験がありません。

アフリカからやってきた好奇心の塊のようなこざるのジョージがおこす騒動に、子どもは夢中になります。ジョージは痛い目にあっても、叱られて

も、そのたびに反省はしますが、すぐにまた次のいたずらにとりかかります。動物園から逃げだし、バスの屋根にとび乗って市内見物をし、レストランの調理場でスパゲッティだらけになり……。

新しい物を知りたい、触りたい、使ってみたいという強い好奇心と行動力は、まさに子どもそのものです。子どもにとって、ジョージは自分自身であり、英雄でもあるのでしょう。この本を好きな子をみると、いかにもという元気な子ばかりでなく、優等生タイプのおとなしい女の子もいるのが、おもしろいところです。

『11ぴきのねこふくろのなか』

馬場のぼる　こぐま社

このシリーズが子どもを魅了するのは、ねこたちの楽しそうな、のどかな表情です。表紙を見ると、もう中を開けずにいられません。

話は、とらねこ大将を先頭に、遠足に行く11ぴき。一面の花の原にさしかかると「はなをとるな」の立て札。ねこたちは「いっぱいあるから　ひとつぐらい　とってもいいさ」「うん　ひとつならだいじょうぶ」、なんだか私達の日頃の行動を写しているようで、どきっとさせられる所です。とらねこ大将の「だめっ」の制止も、「ひとつだけ」の声には勝てず、次のページをめくると、みんな頭に花をつけ、少々神妙な顔で歩いています。しかし反省はここまでで、後は「きけんはしをわたるな」「木にのぼるな」「ふくろにはいるな」の警告を次々無視して、読者をハラハラさせます。そして案の定、袋に入ったねこたちは、ウヒアハという化物につかまりますが、11ぴき力を合わせて、計略を練ってウヒアハをやっつけ、嬉しくてたまらない満足気な顔で意気ようようと山をおりてくるのです。この満足感の共有こそが、読者の醍醐味ではないでしょうか。

『ラチとらいおん』

マレーク・ベロニカ　ぶん・え　福音館

世界一弱い男の子のお話です。

「ラチは　せかいじゅうでいちばん　よわむしでした」。このはじめの言葉に、子どもがどれほど引きつけられるか、読むたびに驚かされます。ラチは、犬も暗やみも友達さえも恐いのです。それでもラチは、飛行士になりたいとの望みを持っています。いつも仲間はずれにされて泣いていたラチが、小さな赤いらいおんの助けを借りてどんどん力をつけ、とうとういじめっ子をやりこめるというお話です。

子ども達は、幼稚園に入る頃から、くりかえしくりかえしこの本を読んでもらって大きくなっていきます。子ども達のまじめな悩みを垣間見せてくれる一冊です。

『きょうはなんのひ？』

瀬田貞二作　林明子絵　福音館

私の文庫で、「好きな本」として一番多くの子に選ばれるのが、この本です。

朝、まみこは「おかあさん　きょうはなんのひだかしってるの？　しらないのしらないの　しらなきゃかいだんさんだんめ」と、謎のような言葉を残して、学校へ行ってしまいます。その後でお母さんが階段を見ると、三段目に次の指示を書いた手紙があって、またそれを見ると……。最後に郵便箱に、まみこからのプレゼントが届いています。それは、まみこが千代紙で作った十組の入れ子の箱。おしまいの小さな箱の中には、青と赤の実が宝石のように並んでいます。お父さんとお母さんの十度目の結婚記念日だったのです。そして両親から、まみこはかわいい子犬をもらいます。この本には、大冒険もどきどきするようなスリルもありません。しかし、平凡な家庭生活のだれもが望みうるしあわせがあるのです。四歳から五年生まで幅広い年齢の子ども達が、この本を好きと推しつづけています。この子ど

も達の願いのなんと慎ましいこと、それにくらべて、親の子どもへの期待はどうでしょうか？

文庫の子が好きと印をつける本のカードを見ていると、ペーシェンス・ストロングの「子供たち」という詩を思い出します。

〝……子供たちは、この悩みのおおい人の世に、自分から好んで生まれてきたのではありません…中略…。子供たちには、もてなしや金目のおもちゃよりも、愛情が必要です。愛と理解が　幸福な家庭とまじり気のない喜びが。にっこり笑いかける顔、思いやりのある声、平和とハーモニーが、幼い人びとに生きていく喜びと自信をあたえます。……〟

（ポケット文庫主宰）

『動物行動学入門』
『生涯発達の心理学　一巻』
『ライフサイクルの心理学　上・下』

水野　悌一